

【心に留めて、先へ】

鬼病が人を苦しめたという歴史は、古くからあります。例えば、天平9年（七三七）に藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）を死に追いやったことで知られる、豌豆瘡の流行（巷では「裳瘡」と呼ばれていました。今日の天然痘のことです）。『続日本紀』には、各地で多くの人が亡くなったとあります。外交の窓口であった九州では、2年前からひどかった様子が記されています。今日と同様に、病への対応が求められ、住人には食料などの給付と減税が繰り返されています。いったんは収束したかのようにみえて、人々の往来が、その範囲を拡大していきました。

そうした間の、天平8年（七三六）のできごとです。病がいまだ潜む九州を通過して、新羅へ遣わされた使者たちがいました。奈良の都を出発して、大阪から船に乗り、瀬戸内海を通過して九州に入ります。『万葉集』巻十五には、道中で詠まれた歌がたくさん残されています。その中に、九州から壱岐島へ渡った時のこと、鬼病で亡くなった雪連宅満（ゆきのむらじやかまろ）を悲しむ歌が記されています。ご家族は帰りを待ち焦がれているだろうに、出かけようとしている遠い国にも着かないまま、故郷からも遠く離れて亡くなってしまったあなた。あの人はどうしたの？と尋ねられたらなんと言おうかと、作者は嘆いています。末尾の歌では、「世の中なんていつもこんなもんさと別れた、あなたを切なく、私は思いながら行くのか」と結んでいます。

世の中は常かくのみと別れぬる君にやもとな我が恋ひ行かむ 三六九〇番歌
与能奈可波 都祢可久能未等 和可礼奴流 君尔也毛登奈 安我孤悲由加牟

ここまでの旅だけでも、時に船が流され、一晚中海を漂った、苦しい旅をともにしてきました。作者は、人生のはかなさを嘆きながらも、友への思いを心にしっかり留めて、自らは先に進まねばならないことを承知しています。歌うことが、その思いを長く伝えることになりました。私たちも、新型コロナウイルスの経験に、さまざまな思いを抱かずにはいられませんが、心して、新たな日常に向き合いたいと思います。

【『City Life』 2012年7月号北摂版掲載】